

2010年5月10日

松本医院にかかるまでの病歴と現在までの治療経過

はじめに

私は初期のリウマチの発症を契機に松本医院にお世話になりました。西洋医学的なリウマチの治療を開始する前に松本先生と出会ったため、リウマチについては現在ほぼ症状が出ないまでに良くなり、他のリウマチ患者さんに比べれば運が良かったと思います。それでもリウマチの発症に至るまでの長い間（リウマチよりも遥かに長い期間）、自律神経失調症、喘息、アトピーの誤った治療を受け続け、いろいろなものを失いました。

失ったもののことを考えると、誤った治療法が横行しているとはいえ、なぜもっと早く正しい道を選べなかったのかという後悔の気持ちでいっぱいになります。私は普段マイナス思考にならないように心掛けて生きておりますが、いざ自分が手記を書くとなると、どうしてもこうした気持ちと向き合わなければならないこととなります。

松本先生は、患者さんが手記を読むことで自信を持って治療を受けられるようにお考えになって、手記を依頼されているかと思ひますし、私自身も闘病中に手記を読み不安が解消させていただきましたので、その大切さは身をもって理解できるのですが、私としては上記の理由や普段このような文章を書くことがないため、これは相当エネルギーのいる作業で、自分自身になんらかのメリットが見出せないと始められませんでした。それでも重い腰を上げて書き始めてみると、どこまでが自分が悪かったか、どこが医者への責任かはっきりし、これまでの漠然とした後悔の気持ちが整理されていくことに気づきました。

元々の病気のきっかけは免疫を抑える治療法ではなく、免疫を低下させる生活習慣、ストレスをためる物の考え方であり、免疫を抑える薬を避けるだけでは、またいつか病気になってしまう。そうならないためには、過去の病気の発症の経緯を見つめなおし、そこから免疫を高める生き方を模索することが大事であることにも気がつきました。

書きかけのデータを消失してしまい、モチベーションを失って再び起こすのに時間がかかりましたが、連休を利用してようやく完成いたしました。

先生に手記を依頼されてかられほどまでに時間がかかったことを、深くお詫
び申し上げます。

松本医院にかかるまでの病歴

幼児期

アトピー：

物心がつくころには肘の内側やひざの裏にアトピーがありました。運動を
したりして汗をかくと痒くなり、ボリボリ搔いていました。

喘息：

なし

その他：

卵、そば、キノコ類、タコイカ類にアレルギーがあり、痒みや嘔吐を起こす
ことがわかりました。

小学校低学年

アトピー：

引き続き症状が出ていました。耳の付け根などにも症状が現れ、直りが悪く、
ジュクジュクした傷ができたときは診療所で薬を塗ってもらいガーゼで傷を保
護していました。

喘息：

入学前後から季節の変わり目など年に3，4回に発作を起こすようになりま
した。発作の起こったときは診療所で吸入を受け、飲み薬（テオドール等）を
服用していました。

小学校高学年

アトピー：

症状はありましたが、ジュクジュクした傷ができることはなく通院はなし。

喘息：

相変わらず発作を度々起こしていたので、ネブライザーを購入し毎朝インタ
ールという薬を吸入していました。発作が起こったときは発作用の薬（気管支
拡張薬か？）と同じように吸入していました。それでも収まらないときは通院
して、飲み薬をもらっていました。

船に泊まる学校行事の際に発作を起こしました。埃っぽい場所や環境の変化に
注意を払うようになりました。

中学校

アトピー：

軽微な症状はありましたが、通院なし。

喘息：

発作がおこらなくなったため、吸入を止めました。泊まりの旅行でも発作は起こりませんでした。

高校

アトピー：

軽微な症状はありましたが、通院なし。

喘息：

発作はほぼ起こりませんでした。スキー旅行で発作を起こしました。(気圧の変化か?)

その他：

腹痛でかかりつけの診療所に通院した際に、ペニシリンを処方され2、3日服用した後、アレルギー反応で腸炎を起こし1週間入院しました。入院中は点滴(解毒の薬と言われたが詳細不明)をされました。痛みが我慢できるなくなる度にナースコールをし、痛み止めの注射を打ってもらっていたら起きているのに夢の中のような感覚に襲われ、怖くなって痛みを我慢するようにしていましたが、退院後、注射をされた周辺や指先に皮膚感覚が麻痺するような症状が残りました。薬による副作用なら同じ病院で見てもらったほうが良いと考え、同じ病院の神経内科にかかりましたが、原因不明ということで精神科にまわされ、カウンセリングを受けたりよくわからない薬を出されました。

これでは治るわけがないと考え別の病院にかかると、自律神経失調症と言われました。これといった治療法もないということで、通院をやめ放置しました。それまでは医者といえば、病気を治してくれる偉い人という認識でしたが、自分がアレルギー体質であることを熟知しているのにペニシリンを処方したり、幻覚を起こしたり麻痺が残るような薬を平気で使うようなことをされ、医者というものが信用できないようになりました。

浪人中

アトピー：

軽微な症状はありましたが、通院なし。

喘息：

遠方の大学を受験しにビジネスホテルに泊まった際に発作を起こしました。

その他：

急に手が冷たくなり、震えが起こり、病院へいくと過呼吸との診断で、よく

わからない薬をもらいました。自律神経失調症に効くということでクロレラを飲んだりしました。クロレラの液体を飲んでしばらくすると真っ黒な宿便出て、因果関係ははっきりしませんが、時間の経過と共に自律神経失調症体調がよくなりました。

大学前半

アトピー：

症状はありましたが、通院なし。

喘息：

大学に入り、就職後の残業に耐えられるようにと体育会系のサークルに入りました。当初は運動をすることで食欲も増し、やせ気味だった体重も標準体重に近いまでになり、体力も以前よりつきましたが、合宿で夜中に発作を起こし、その後も練習中に発作を起こしたりするようになりました。

その合宿以降、過呼吸や喘息の発作を起こすようになりました。今考えると練習に遅れが生じたことによる焦りや、深夜にまで及ぶミーティングなどで精神的なストレスが溜まっていたのだと思います。発作を繰り返すうちに気管支が常に腫れて気道が狭まっているような状態になり、ちょっとした運動でも体が熱を帯び疲れてしますようになりました。医者にかかり毎日使うステロイドの吸入器と発作時に使う気管支拡張の吸入器を出されましたが、医者を信用できなくなっていた私はどちらも使用はしませんでした。ステロイドはだんだん効きにくくなり、最後は入院生活になるとか、気管支拡張薬は苦しさから過量になり心臓に負担がかかって死亡するといったことが新聞で騒がれていたからです。

ステロイドに頼らない治療法はないかと、本屋で喘息の本を見て回り、喘息はIgE抗体というものが原因（アレルギーを起こす物質にその抗体が反応し炎症が起こる）で起こり、アレルギー体質の人はその抗体が多い人であるという知識を得ました。また、減感作療法という治療法がありその治療は体質そのものを変えることができるということも知りました。しかし、その治療は遠方に通わないと受けられないこと、あまり一般的な治療とは思えなかったことから、その治療を受けたいと両親に言い出すことはできませんでした。

しかたなく医者にかからずに自分で治す方法を考えてあれこれと試しました。一つ目は、気管支に入ってくる空気中のハウスダストやダニを減らすことでした。当時の私は、空気中のダニや食べ物に含まれるたんぱく質が、分解されずに気管支の粘膜や腸管から吸収されて、そのたんぱく質にIgE抗体が反応してアレルギー疾患が起こると理解していました（アレルギー関係の書籍より）。喘息の原因となっているアレルゲンを検査してもらったところ、ハウスダスト

やダニが原因ということがわかったので、ベッドの横に空気清浄機を置きました。また、食物として体の中に入るアレルゲンを減らそうと食生活を変えました。昔は成人になると自然に治ったといわれていたアレルギー疾患が成人になっても続くようになったのは、戦後の食生活の欧米化によってたんぱく質の摂取量が増加したことに、たんぱく質を分解する能力の低い日本人が適応できないために起こっているのではないかと考えていましたので、肉や玉子をいっさい食べずに野菜と魚を中心とした和食のみを食べ、化学調味料など戦前になかったものも徹底的に避けました。アレルゲンが減ればアレルゲンを少しずつ体に取り入れる減感作療法と同じ効果が得られるのではないかと考えたのです。

二つ目は、成人並みの体力をつけてることでした。中学高校時代はどちらもほとんど症状が出ていなかったのに、大学でまた出始めたのは浪人中は体を動かすこともないし体力が低下していたからで、体力をつければ抵抗力が強まり治るのではないかと考えたのです。しかし、大学まで自転車で通ったり、サークルの練習に打ち込んでも体力を消耗するばかりで抵抗力がつくことはありませんでした。

三つ目はストレスを避けることでした。サークルの先輩が「いつも笑っている人には喘息やアトピーの人はいない」と言われ、楽しいことをするようにしようと考えました。今考えるとサークルと学業の両立は体力的に無理があり、サークル活動を継続しては体力を消耗するより退部するべきでしたが、当時は先に述べたように運動をすれば治ると考えていたため、退部して学業に専念しても今の体調では仕事に就けないからと、学業そっちのけでサークル活動に打ち込みました。

しかし、体調はなかなか良くなりませんでした。連夜続く発作の苦しきから「後何年生きられるだろう」とか「このまま何もせずに死んでいくのか」とか「死ぬことが怖いと思っていたけど、本当に死にそうな状態になると死ぬことが救いに思えるようになるんだなあ」などと考えることさえありました。

そんな折、発作がひどくなる時期に、規則性があることに気がつきました。サークルが始まる少し前の3月末や8月末ごろになると発作が起こっていたのです。これはサークルがストレスになっていたのか、季節の変わり目によるストレスであったのか今となってはわかりませんが、結局サークルを退部することにしました。それから半年ほどで自然と慢性的な気管支の炎症は治まりました。

その他：

浪人時代と同様に過呼吸の発作を起こして2ヶ月ほど通院し、飲み薬を服用。

大学後半

慢性的な気管支の腫れが引くのと同時に、幼少期から続いていた関節周辺に起こる軽度のアトピーと異質のアトピーが出始めました。喘息のときのような死にたくなるような苦しさはありませんでしたが、夜中は眠れず、講義中は痒みを我慢することしか考えられないような状態になりました。

アトピーは小学校のときに2、3回通院した程度で、基本的に医者にかかるような病気という認識がありませんでしたので、自分で治そうと考えました。喘息は、時間はかかったものの空気清浄機による空気中のアレルゲンの除去をしたことと激しい運動を止めたことにより気管支への刺激が少なくなり、粘膜が回復してバリアが形成されたことで治ったと考えていましたので、アトピーも同じ理屈で治ると考え、防ダニ加工の畳の上にアトピー用の布団で眠ることで皮膚に触れる刺激を減らすとともに、痒くても極力搔かないように心掛けました。引っ搔いて傷を作るとそこにアレルゲンが接触して、余計にひどくなるから、搔いてはいけないと考えていたのです。

しかしながら、薬も使わずに劇的によくなるわけもなく、寝たきりのような生活を送りながら何ヶ月か経った頃、アトピーが悪化してまともに大学へ通えていないということを知りつけた親戚が、漢方でアトピーを治す医者が市内におり、実際にそこで治った人がいるということを知ってくれました。

西洋医学の医者は信用ならないが、漢方なら副作用は出ないし安全だろうということで、紹介された診療所に行くことになりました。その診療所では院長先生の他に漢方のアドバイザーのような方がおられ、脈や顔色などを見てその人の状態に合わせた煎じ薬と塗り薬、薬湯を出されました。塗り薬は2種類ありました。1つは紫の薬で、もう1つは黒い薬で漢方薬が含まれているようでしたが、塗った後の劇的な効果を思い返すとステロイドの塗り薬も入っていたのではないかと思います。黒い塗り薬を塗るとあっという間に傷はふさがりましたが、皮膚が薄くなり薄くなった皮膚に塗った薬が異物として痒みをもたらした、搔いてはいけないものだから叩いたりこすったりして痒みをごまかしていました。とにかく黒い薬さえ塗っていれば布団から出れないというほどの痛みは抑えられていたのでそればかり塗っていました。

ある朝、顔を叩いていつものように痒みをごまかしていると突然文字が見えにくくなりました。最初は顔を叩いたことによって、目をこすった後のように一時的に視力が低下したのだらうと考えましたが、いつまで経っても治らずこれはおかしいということで眼科に行くと、アトピー性の白内障でアトピーのために顔を叩いていると発生する合併症だといわれました。アトピーなら喘息のように死ぬこともないし、漢方薬は副作用が少ないし、仮に副作用が出ても命

には別状がないだろうと安心していただけなのに、突然両目が曇ってまともに歩けなくなり視力が下がり、手術をしないと治らないと言われ目の前が真っ暗になりました。「いくら副作用が少なくても症状を抑えないことで不可逆的な障害が残ったら何にもならないではないか」と、期待していた東洋医学に裏切られた気持ちでした。

目の手術をするためアトピーの症状を安定させなければいけないということで、西洋医学の権威であり、皮膚科の評判が良いという大学病院へかかることになりました。大学病院では、副作用はあるが短期間服用する分には問題がないという強めの飲み薬（おそらくなんらかのステロイド）をもらい、1週間くらい飲むとアトピーがあったことすら忘れてしまうほど劇的によくくなりました。その後は飲み薬は中止し、上半身下半身、顔のそれぞれ左右と額の7箇所違う塗り薬を塗りわけ、合う薬を探しました。いろいろと試した結果、顔には治療の薬、体にはマイザー軟膏が一番あうことがわかりました。

症状が安定したことで、手術も無事終わり両目とも見えるようになり（裸眼では近くのものが見えにくくなる障害は残りましたが）、痒みやこれといった副作用もなく、無事に大学を卒業し就職することもできました。こうした経験の中で私は当時の主治医を絶対的に信用するに至ったのです。

就職後

就職した会社では、採用時に喘息で休学状態だったことについて話をしましたが、分煙についてまったく考慮されることがなかったため、夜寝るときになっても皮膚や喉にタバコのおいが染み付いて、喘息の一步手前のような症状が出るようになりました。仕事でもタバコで咳をしたくなりましたが、咳をするとタバコを吸うなど言っているように思われるのではないという恐れからこらえるしかありませんでした。アトピーについてはタバコが皮膚に染み付いていることで気持ち悪さはあったものの、不思議と痒みは起こりませんでした。

結局、自分自身の未熟さもあり試用期間後に退職することとなりましたが、実社会の厳しさと不条理さが身にしみました。その会社を辞めた後、喘息が起こりその後アトピーに変わりました。体調も歩く次の就職先が決まらなかったため、とりあえず工場でアルバイトをしていましたが、作業着に問題（材質、通気性）があるのか、同僚が休憩中に吸うタバコのせいかわかりませんでした。仕事が終わる頃には痒くて仕方がなくなりました。ようやく、次の就職先が見つかりましたが、その会社も分煙がされておらず、長く続けることはできませんでした。その会社を辞めた後も、喘息が起こりその後アトピーに変わ

りました。

しかし、今回はアトピーの症状が重く、塗り薬を塗っても安定しなくなりました。退職のストレスのためだったかもしれません。その頃は主治医が大学病院をやめ診療所を開設していたので、その診療所にかかっていたが、長期間症状に変化がないため一度大学病院で入院して治すことになりました。

入院中はジスロマックという抗生物質を3日間服用し、体にマイザー軟膏、顔にキンダベート軟膏を塗っていました。1週間ほどで皮膚の状態が安定し、退院しましたが家に帰ると2、3週間でまた元の状態に戻りました。

都合3度、喘息からアトピーへの変化を経験しましたが、気管支や皮膚のバリアを強くし、症状を抑えるだけという治療法に限界を感じるようになってしまいました。自分の体の中にアレルギーを起こす物質が出口を求めてさまよっており、どちらかを抑えてもどちらかが顔を出すモグラ叩きのような状態で、ステロイドの塗り薬で出口の傷口をふさいでも皮膚すぐ下に炎症の元がくすぶっており、何かきっかけがあればいつでも飛び出せる状態になっているのが感じられたからです。しかし、主治医のことは信頼していたし、他に信用できるものが何もなかったので、退院後も塗り薬を塗りながら体に合う飲み薬を探すことになりました。

塗り薬については、顔に塗っていた薬の治験期間が終わり使えなくなったため、プロトピックに変わっていましたが、プロトピックは塗っても効いている感じがなく、顔が火照って顔を叩きたくなったので、眼疾を恐れて塗りませんでした。代わりにマイザーをなるべく薄くぬっていました。

飲み薬については、ペニシリンの件で懲りていたので何かおかしいところが出ればすぐに服用を中止していました。試した飲み薬は以下のようなものでした。

エピナジオン：効果なし

ジスロマック：ジュクジュクした傷が治まる

ツムラの漢方（銀に黄色の帯）：痒みが軽減

ツムラの漢方（銀に水色の帯）：手首や足首が浮腫んできたのを報告し、服用を中止

ビタミンC：痒み止め

カルシウム剤：痒み止め

他にもあったかもしませんが、飲むと心臓が苦しくなったりする薬などがあり、なかなか副作用が出ず効果がある薬が見つかりませんでした。

そんな中でメドロールという薬を飲むと劇的に良くなり、これといった副作

用もでなかったもので、これを飲むことになりました。メドロールはステロイド薬で長く飲むのは良くないということだったので、大学時代のように1週間飲んですぐ塗り薬に切り替えられるものと考えていましたが、量を当初の一日3錠から1錠に減らすことはすぐにできましたが、そこから減らすと症状が悪化するため、なかなか量を減らせませんでした。(最終的にゼロにするまでに1年半かかることになりました。)

ともかく、症状は劇的によくなり量さえ減らさなければ安定させられたので、リハビリがてら職場環境の良い行政機関でアルバイトを始めました。

飲み始めて半年ほどたったころ、自転車で職場に着いた直後心臓が苦しくなり、貧血のように顔が真っ青になりました。横になっても治らないので病院に連れて行ってもらい、心電図や血液検査を受けると特に異常は見られないということでしたし、症状も徐々に治まりましたが、こういう発作が起こると数日はまた起こる可能性があるということで、大事を取って3日ほど仕事を休みました。検査の結果自体は大丈夫だといわれましたが、血を抜いた際に血が止まりにくく、それはステロイドを飲んでいながらだと医者から説明を受け、自分の体の中がどうなっているのかという恐怖に襲われました。メドロールについてもどのような副作用があるか調べてはいましたが、半年飲んでもまったく副作用がなかったので、それまでの副作用が出た薬と違い自分の体に合っているのだと考えていました。しかし、薬の副作用の記載は基本的に、目に見える症状だけで、その症状が出る原因となる、体内の変化についての記載はいっさいありません。症状が出てくる頃にはどうしようもない状態になっているということを思い知り、一刻も早く薬をゼロにしようと、すぐさま一日半錠に減らしました。

その後は、このときほどひどい貧血は起こりませんでした。度々おかしな症状(視力の低下、指先の痺れ、胸痛、喉の異常な渇き、体に力が入らなくなり、ちょっと歩いただけで異常に疲れる)が現れました。指先の痺れについて整形外科にかかると、ステロイドの量を減らしたことにより神経に炎症が起こっていると言われ、神経ブロックの注射をしてもらうと、しばらくして治りました。

一日半錠から二日で半錠にするとまったく飲まない日が発生し、体内のステロイドの量のバランスが悪く症状が安定しないので、一日半で半錠に減らし、その後は毎日4分の1錠飲むようにしていき、その後ゼロにしました。

ゼロにしたあと、禁断症状(胸がしめつけられるような感覚)が現れました。いつもは朝飲んでいましたが、かばんに入れて持ち歩き禁断症状が現れたときにだけ飲むようにしました。

そうしてようやく平成20年の10月に完全に薬を断ち切ることに成功しま

した。

メドロールの中止と同じ頃、指や手のひら足の裏に物が当たると痛みを感じるようになりました。最初は自転車に乗っていることによる炎症かと思いましたが、なんとなく手や足の指が細くなっているような気がしました。痛みが段々ひどくなるので、これはおかしいとインターネットで調べてみるとリウマチという病気がピッタリくることがわかりました。リウマチは早期治療が大事だということで、その日のうちに指の痺れを治してもらった整形外科にかかることにしました。そこではレントゲンと血液検査を受け、リウマチかどうか検査結果が戻ってくる一週間後までわからないが、とりあえず塗り薬を塗っておくとステロイドの塗り薬をもらいました。あれほど懲りていたステロイドでありましたが、塗り薬を塗らないと関節が破壊されてしまうのではなと考え薬を塗ることにしましたが、検査結果を聞くまでもなく、全身の異常のたるさや朝の腫れ、他の関節への痛みの広がりから、リウマチに違いないと思いました。引き続きリウマチについてインターネットで調べてみると不治の病で最終的に寝たきりになって、内臓にも障害が起こるという恐ろしい情報ばかりが目につきました。そこで「リウマチ」という単語の他に、「根治」や「治す」といった前向きなキーワードで検索してみると、松本医院のホームページが見つかりました。とりあえずリウマチの項目を読んでみると、ステロイド、アレルギー、免疫の関係を理論的に説明しておられ、これまで自分が抱いていた疑問を解きほぐしてくれるような内容であったこと、文章から必ず治せるという自信が感じられたことで、ここしかないと思ひ立ち、週末の朝一番に見てもらおうと高槻に向かいました。

松本医院での治療経過

平成 20 年 10 月

休日ともなると全国からリウマチ患者が殺到して開院前から列を作っているのではないかと考え、早めに家を出て 8 時すぎに高槻の駅に着きました。多少迷った後、8 時半ごろ松本医院を発見すると入り口には誰も人が並んでいませんでした。受付開始時間をすぎてもひと気はなく、これはもしかしてとんでもないホラ吹きにひっかかったのではないかと（誰も患者がこなくて、休業状態の医院ではないかと）と、立っているだけでもつらい節々の関節に耐えながら 20 分ほど待っていると、一人患者さんが現れとりあえず安心をしました。実は受付開始時間を 9 時だと勘違いしていたのでした。それからほどなくして入り口が開き受付をすると、初診ということで問診票を記入し手記を読んで待つように言われました。リウマチの人の手記を読むと、ここまで悪化している人でもよくなっているのだから、それよりはるかに症状の軽い自分なら絶対治ると

確信しました。診察室に呼ばれるまで非常に長く感じましたが、ようやく呼ばれて中に入ると、言葉使いは汚いけれど、情熱的で自信に満ちた手記のイメージ通りの先生がおられました。それまで自分がかかってきた医者は、皆どこか自信がなさげでこの薬がだめなら別の試すといった具合に薬を出しているだけで、結局飲む薬を患者の訴え（効いた効かない）に委ねているような人ばかりでした。

先生は症状と共に、これまで飲んでいた薬の種類と量を尋ねられ、血液検査をする前からリウマチだとおっしゃられました。私はリウマチと言われましたが、不思議と怖くはありませんでした。インターネットにあるように、いくつかの項目に該当したらリウマチと診断できるというわけのわからない診断基準で「あなたはリウマチじゃない」と診断され、「もっとひどくなってリウマチと診断されるまでは放置しておきなさい。」と言われるよりよっぽどましでしたし、不治の病であるとされているリウマチは、ホームページや手記を読んだ結果、私の中ですでに治る病気という認識に変わっていたからです。ステロイドをたくさん飲んでいたことを責められましたが、必ず治してあげると力強く握手をしてくださったおかげで、前向きに治療を始める気持ちがわきました。

その日は血液検査をした後、鍼とお灸をしてもらいました。

お灸も鍼も初めての経験でしたが、先生の腕がいいからか、恐れていた痛みや熱さはそれほどでもありませんでした。鍼灸の後は、体がポカポカして痛みが心持ち軽くなったように思えました。

その日は、薬湯と塗り薬、消毒液をもらい、お金が足りなくなったので飲み薬は月曜日に地元の調剤薬局でもらおうとしましたが、地元の薬局では薬がそろわず、先生に宅急便で送っていただくことになりました。

薬湯に入ると体がぼかぼかして、炎症が収まるような感じがしました。皮膚もしっとりとしてすべすべになりました。飲み薬はリウマチ用に調合された漢方薬を煎じて飲んでいましたが、2、3日飲み続けると手首や足首の付け根を中心に浮腫んできました。以前皮膚科でもらっていた漢方薬でも同じ症状が出て、その時は服用を中止するように指示されたので、体に合わなかったのではないかと怖くなって先生に「このまま飲み続けても大丈夫か」と電話で聞きました。先生は大丈夫だとおっしゃられましたが、浮腫んだところが痒くてしかたなくなり、靴を履いたりペンを持つのにも支障が出るほど腫れがひどくなったので、飲む量を減らして様子を見ました。数日すると腫れはひいていきその後はそのような症状が出ることはありませんでした。

平成 20 年 11 月

2 週間が経ち薬もなくなったので、再び松本医院に向かいました。薬で症状

が抑えられているのか免疫が回復したのかはわかりませんでした。前回ほどのだるさや痛みはなくなっていました。診察室に入って血液検査の結果を聞くとリウマチの値は正常値ということでした。しかし免疫をずっと抑えていたため、リンパ球の割合が正常値以下でかなり低くなっていること、それだけ免疫を抑えてもアレルギーの I g E 抗体も正常値の何万倍も高い数字だと説明されました。

その日は薬局でもぐさを買ひ、アトピーの煎じ薬ももらうようになりました。家で痛いところを中心に灸に挑戦しました。自分でやると山が大きすぎて熱くなりすぎたり、上手く置きたい場所におけなかつたりで、一通り痛い場所にやるだけでヘトヘトになりました。痛みがひどいときは一刻も早く治りたいと頑張れるのですが、ちょっと痛みがましになるとサボりがちになりました。

平成 20 年 12 月

症状が安定してきたので、月 1 回だけ通院し 1 回は電話で薬だけ送ってもらうようにしました。

平成 21 年 1 月～2 月

ピリピリした痛みが走ることがあったので、前回と同じような項目の検査に加え、ヘルペスの値を調べる血液検査を受け、ヘルペスの菌を抑える薬をもらって服用しました。

リウマチに良いと聞いて、少しでも早く治すために、近所のプールで週 2、3 回ウォーキングを始めましたが、頑張りすぎて足首に痛みが出ました。

平成 21 年 3 月～4 月

体が猛烈に痒くなり、かつてないほどひどいアトピーが起こりました。

このアトピーは最初ひどい痒みが襲ってきた後、掻いた後がケロイドみたいになり、全身（特に顔から）黄色い液（以下リンパ液）が止めどなく流れるようになりました。消毒薬は痛すぎて塗れないし、エルタインや紫の薬を塗ると一時的に皮膚がガードされ痛みが軽減しましたが、すぐにリンパ液が染み出てエルタインを流し去ってしまいました。寝ているときも顔の向きによっていろんな箇所からリンパ液が流れるので気になってまともに眠れませんでした。空気（特に冷たい空気）が触れると痛みが走るので、家にいるときは一日中布団の中で生活し、食事でも布団の中で顔も出さず食べていました。仕事に行くときは、顔中に包帯を巻いて空気に触れないようにして、耳はニット帽、目には水中眼鏡という格好で自転車に乗って通勤しました。

職場の空気は比較的暖かく、包帯をしていればかろうじて痛みを我慢できま

したので、週に1回だけ睡眠不足を解消するために休みをもらい、それ以外は出勤しました。

1ヶ月くらいそんな状態が続きました。リンパ液を止めないと塗り薬は効かないので、薬湯に息を止めながら顔を突っ込んで何度も浸すことを繰り返して治そうとしました。痛みは多少軽減されたように思いましたが、リンパ液はやはり止まらず、インターネットで黄色い液の正体とどうやったら止まるのかを調べました。黄色い液の正体はリンパ液で体から毒が出ているわけではないということがわかりました。そこで亜鉛華軟膏という薬が良いとわかり、色々調べてみると家に以前もらったものがありましたので、それを塗ると2、3日で包帯が取れるまでになり、リンパ液が止まったと後はエルタシンを塗っておきました。

平成21年5月

その後はリウマチの痛みが出なくなったので、アトピーの飲み薬だけを飲むようになり、薬湯も週に2回になりました。アトピーも3月4月の出来事はなんだったのかというくらいきれいになりました。ステロイドを使っていたときのような、抑えて表面上きれいになったけど内側にくすぶっているようときと違う感覚になりました。

アトピーの症状もほぼなくなった頃に、メドロールを飲んでいたときのように胸の苦しさが起こり、体に力が入らなくなり、ちょっと歩いただけで異常に疲れる症状が現れました。症状が治まっているのに以前と同じ量の薬を飲んでいるのがいけないのかもしれないと考え、症状が治まるまで飲み薬は中止しました。その後、量を半分にして様子を見てから通常量に戻しました。通常量に戻しても症状が再現されませんでしたので、結局原因はわかりませんでした。

平成21年6月

血液検査を受け結果を教えてくださいました。治療開始当初10%だったリンパ球は順調に増え続け20%になっていました。ヘルペスの値はやや下がっていました。

平成21年8月～11月

体調が安定してきたので、転職先を探そうと就職活動を始めました。

そんなとき、どうしても時間に間に合いそうに無く1キロほど走るはめになりました。リウマチになって走ることがほとんどなかったためか、走り終わった後足首の関節の周辺がグチュグチュになってしまいました。整骨院にいき電気を当ててもらい3週間ほどで完治しました。

ある面接のある日には、リウマチ発症当初のような体のだるさと熱っぽさが

出たことがありました。今後どこで働くかわからないもやもやした状態が解消するまでは、体の調子が悪いままでした。やはりまだいつリウマチが再発しても不思議ではない状態だということがわかりました。その後はストレスを感じたり、関節に負担をかけるようなことは避けるようになりました。

8月は血液検査を受け結果を教えてくださいました。相変わらず数値は順調でリンパ球は24.5%になりました。

10月にも検査を受けIgE(非特異的)の値が治療開始当初の15580のところ、9360まで下がっていましたが、リンパ球が17.5%と正常値を割り込みました。9月にリュウマチ発症当初のような症状が出ていたため、悪化したのかと心配しましたが11月の検査では20.1%と正常値まで戻りました。

松本先生に治療の途中経過の手記を書くように依頼されました。

平成21年12月～平成22年2月

アトピーとリウマチは、無理さえしなければ症状を気にすることはなくなってくる。漢方の量が多いのか、煎じ方が悪いのか消化器系の具合が悪くなりました。

胃や食道の辺りが熱くなり食欲がなくなりました。工作中、何度も便意をもよおすようになりましたが、出るのはオナラか少量の軟便ばかりで仕事に集中できなくなりました。飲む量を減らすと2週間ほどでよくなりました。先生に相談してビオフェルミンをいただき煎じ薬も変えていただきましたが、やはり胃の不快感がひどく、煎じ薬はしばらく飲むのを止めました。

平成22年3月

口の周りが少し乾燥気味になって荒れてきました。季節的に昨年のような症状が出る予兆かもしれないと警戒をしましたが、ただ乾燥気味なだけでアトピー特有の中から湧いてくるような痒みはありませんでした。顔以外は特に変化はありませんでした。

平成22年4月

急激に悪化はしませんでした。時々顔が痒くなり、乾燥が顔全体に広がりました。リンパ節の辺りが熱を持つようになりました。関節や骨自体も少し痛むところが出てきました。

まだ薬をやめられるところまで治っていないようなので、煎じ薬を半分にして様子を見ながら飲み始めると、症状が軽減しました。

以上が、これまでの治療経過です。